



江南の子

令和4年度
第8号

「読書の習慣」という人生の財産

校長 藤井 正人

当校の2年生児童が、県課題図書読書感想文コンクールで優秀賞を受賞しました。その感想文の書き出しです。

わたしは、小さいころから、色いろなせかいへつれていってくれる本が大すきです。どうぶつが大すきだけど、いえではペットがかえないわたしは、『きみのなまえ』を読んで、林にいた犬をかうときめたたくとの、ところがポカポカする、やさしいせかいへつれていってもらいました。

「色いろなせかいへつれていってくれる本」…これほど見事に読書の魅力と効用を端的に言い表した言葉はありません。同じことをプロの編集者が次のように述べています。

読書をすることは、実生活では経験できない「別の世界」の経験をし、他者への想像力を磨くことを意味する。本のページをめくればめくるほど、人間の美しさや醜さ、葛藤や悩みが見えてくる。そこには、自分の人生だけでは決して味わえない、豊饒な世界が広がっている。

『読書という荒野』（著：見城 徹 幻冬舎）

当校2年生と見城さんの説に拠れば、次のことが言えます。「読書の習慣がある人生」と「読書の習慣がない人生」では、人生で経験することに大きな差が生まれる。そのことにより、人生の喜びや深み、それらを感じる心の豊かさにも大きな差が生まれる。私も、この説に大いに賛同しており、どんな職業や地位に就こうとも、生涯にわたり、一冊でも多く本を読もうとする「生涯読書人」を育てることを、教師として目指してきました。

学校教育において、子どもを読書に誘うときに大切なのは、まずは図書館の環境です。これまで何回かホームページで紹介しているように、当校の図書館司書は、子どもがすぐ手に取って読みたくなるような図書の陳列や飾り付けの工夫をしています。併せて、新刊図書や人気図書のフェアもタイムリーに実施し、豊かな図書館環境を提供しています。

その他、図書委員会による年2回の読書旬間の設定。月に1回の、ボランティアによる下学年対象の読み聞かせ。各学級でも朝読書や家読^{うちどく}の奨励、学級文庫の設置、読み聞かせ、子ども同士のお勧め本の紹介等、担任の裁量と工夫で様々な取組を実施しています。

これらの成果として、当校の図書館の貸し出し冊数やアンケート調査で「本が好き」と答える児童の割合は、例年市の平均より大きく上回っています。この成果は、学校だけでなく、ご家庭での読書奨励の働き掛けに因るところも大きいと感謝しております。

最後に、私の校長としてのささやかな働き掛けを紹介させてください。それは、後期の読書旬間に合わせて、毎年12月の全校朝会でお薦め本を紹介することです。R1は『怪人二十面相』、R2は『ざんねんな生き物』、R3は『金子みすゞ詩集』。そして今年度は…ある人気絵本です。12月1日の全校朝会后に、お子さんに聞いてくださると幸いです。